ドモ、日數ツモレバ、七月二十六日ノ暮程ニ、鎌倉ニコソ著給ケレ、

名稱

濱

濱ハ、ハマト訓ズ、水邊平沙ノ地ヲ謂フナリ、

〔新撰字鏡〕湄（美悲反、水澄也、波万、又伊曾、）　濆（夫文反、平渟也、水涯也、水支波、又伊曾、又波万、）

〔倭名類聚抄〕濱（一涯岸）　唐韻云、濱水際也、音賓、和名波萬

〔箋注倭名類聚抄〕（一水土）神代紀訓注、汀此云波麻、新撰字鏡、湄字濆字同訓、垠訓八万乃支波万利、下總本有一云保止利五字、（○中略）廣韻同、玄應音義引字林云、濱水涯也、說文作頻、云水厓人所賓附也、王念孫曰、濱與邊聲相近、水濱猶言水邊、故地之四邊、亦謂之濱、小雅北山篇云、率土之濱是也、

〔伊呂波字類抄〕（波地儀）濱（ハマ水際也）　沙汰（同）

〔書言字考節用集〕（一乾坤）濱（ハマ本字顏、說文、水厓也、顏師古云、緣海邊也、）

〔東雅〕（二地輿）濱ハマ　萬葉集抄に、ハマとは、ハといふは白きことばなり、マといふはまはれる詞也と見えたり、されば、ハマとは、麓、讀てハヤマといひしが如くに、その海の端の所なればハアマとは云ひしなるべし、（古語に、アマといひしは海なり、ハアマをハマといひしは、ハといふ詞に、アといふ音の納れる故なり、）舊事紀、日本紀等には、汀の字を讀てハマといひ、また御碕の字讀てミサキといひしを、古事記には、濱の字讀てハマといひ、ミサキには御前の字を用ひしなり、倭名鈔、濱の字を讀む事、古事記に同じくして、汀の字をば唐韻の水際之平沙なりといふ說を引て、讀でミサキといふ、その後には又汀の字をばミギハと讀むなり、碕の字を讀むことは、前に見えし岬の字を讀むが如し、岬は山側をいふと見えたれば、碕は水際をいふなるべし、汀讀てミギハといふは、唐韻水際の義によれるなるべし、（これら又古今の訓、同じから